The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ヨーロッパ諸語における様々なr 音について : 起源と印欧語学への示唆
Author(s)	神山, 孝夫
Citation	待兼山論叢. 文化動態論篇. 2014, 48, p. 33-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56602
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ヨーロッパ諸語における様々な *r* 音について

――起源と印欧語学への示唆――

神 山　孝 夫

キーワード：歯茎ふるえ音／歯茎接近音／口蓋垂の *r*／波紋説／咽頭化

英仏独語の *r* 音

絶対的多数の現代印欧諸語において *r* は標準的に歯茎ふるえ音（alveolar trill）の［r］[1] として発音される．この *r* 音は古典語にも用いられた古来の音と考えられ，さらに印欧語比較言語学においても印欧語の本来の *r* 音には［r］が想定されている．

だが，何の偶然か，現代社会においてもっとも有用な印欧語とも言える英仏独語を中心に，本来の［r］と異なる *r* 音が通例用いられるに至っている．[2] これらの言語において［r］以外の *r* 音が二次的に生じた新たな音であることは恐らく確かであり，実際，多少の社会方言的なニュアンスを帯びたり，時代劇のような古臭い印象を与えることはあるにせよ，変種としての［r］の使用は今なお可能であって，新旧いずれの *r* 音を用いたところで原則的に意思の疎通には何ら影響を及ぼさない．

これまでも折に触れて関連する事情を多少なりとも紹介したことはある（神山 1995: 69, 250, 252; 2008: 35, 75, 133; 2012: 11）．だが，英仏独語等において本来の［r］がどのような経緯によって他の音に置き換えられるに至ったのかについては必ずしもすべてを把握するには至っていなかったことを吐露せねばならない．本誌への寄稿順がめぐってきたことを機会に，この積年のうやむやを解消すべく多少の調査を実施したところ，幸いにもほぼ期待し

たような成果が得られ，概ね溜飲を下げることができたように思う．その概略をここに報告する次第である．さらに，得られた結果の延長から，印欧語比較言語学ないし各印欧語史上の焦眉の問題についても，ある種の示唆が得られるかのように思われるが，誌面と準備の不足から本稿ではその概要を文末に付記するにとどめたい．

今日の定説

英仏独語等の *r* 音の変遷については，恐らく下記（1）～（3）のような説が半ば定説として受け入れられている．Viëtor（1915[6]: 203, 259), Bourciez（1937[8]: 243), Gimson（1980[3]: 123ff., 209）等の記載を時系列順に整理して示す．

（1）　英語において，母音が後続しない *r*［r］が 17 世紀までに歯茎接近音［ɹ］[3] に弱まり，その後，後者が徐々に一般化して，母音に先行する *r* までもが［ɹ］と発音されるに至った.[4]

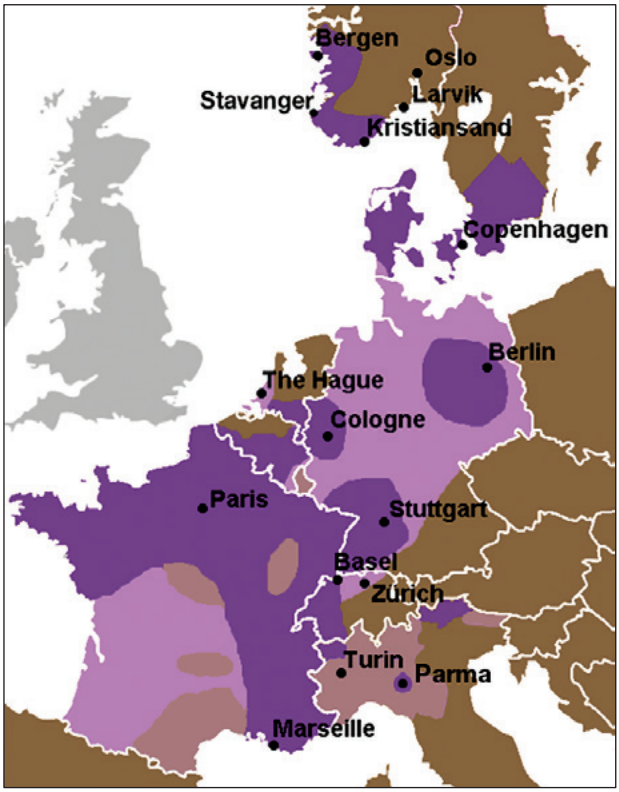
（2）　フランスにおいては，17 世紀中葉にパリの文学サロンに集い，当時の流行の先端にあった「才女たち」（les précieuses[5]）が舌先の代わりに口蓋垂をふるわせる，新たな *r* 音［ʀ］を流行させた．この流行が徐々にフランス語圏全域に広まり，次いでドイツ語圏とデンマーク，さらに部分的にオランダ，スカンディナヴィア半島南部と西部，イタリア北部に波及した．

（3）　（2）の過程が生じた後，*r* 音たる口蓋垂ふるえ音［ʀ］が徐々に口蓋垂摩擦音［ʁ］に簡素化し，無声音に接する場合や語末においては，その無声の異音［χ］も用いられるに至った．

上記（2, 3）の過程によって生じた新たな *r* 音は上に言及した諸言語他において異音として扱われ，そのいずれを用いても意思の疎通には何ら影響を及ぼさない．これらを別個に取扱うことは無意味であるため，以下ではこれらをまとめて「口蓋垂の *r*」（uvular *r*）と総称することにする．

北西大陸ヨーロッパにおける口蓋垂の *r* の最新の分布は以下の（4）に示される.[6)]

（4）



a. 口蓋垂の *r* が通常用いられない地域
b. 口蓋垂の *r* が教養層の一部のみに用いられる地域
c. 口蓋垂の *r* が教養層に用いられる地域
d. 口蓋垂の *r* が一般的に用いられる地域

想定される推移（1）～（3）のうち，（3）は比較的単純な弱化（reduction）ないし緩音化（lenition），ならびに同化（assimilation）の過程と見られ，無理の少ない，ほぼ自然な推移に属すと言える．だが，［r］が印欧語に限らず世界中で広く用いられる，ありふれた音であるのに反し，これに代わって用いられるに至ったという［ɹ］と［ʀ］等は世界の言語の中でかなり珍しい，比較的調音が難しい音であると思われ，後者がそうやすやすと前者を駆逐するとはにわかに信じ難い．総じて言えば，（1, 2）はかなり不自然な推移であると言える．果たしてこれらは正鵠を射ているのであろうか，そして，これらはどのような経緯から生じたのであろうか．

英語の *r* 音

歯茎接近音［ɹ］は世界の言語の中でそう頻繁に用いられる音ではない．そのため英語において［r］が［ɹ］に置き換えられる過程（1）が自然発生した蓋然性は極めて低いように思われる．

だが，英語を含むゲルマン語のいわば「癖」に注視すると，この過程が少なくともゲルマン語においては実際に生じたと考えるべき状況証拠が見出される．

すなわち，ゲルマン語では母音が後続しない /r/ が接近音となり，さらに母音化する，あるいは半ば副次調音化する傾向が広く見られるのである．これは他の印欧語派にはほとんど見られない，恐らくゲルマン語のみに生じた傾向である．

例えば，よく知られているように，今日のドイツ語で /r/ は母音が後続するとき口蓋垂の *r* ないし歯茎ふるえ音の［r］としてしかるべく実現するが，母音が直接後続しないときには著しく調音が弱まり，非成節的な中舌準開母音［ɐ̯］に母音化することがとても多い．さらに，無アクセントの -er は通例［ɐ］と発音される．

オランダ語では /r/ は母音の前で［r］ないし地域によっては口蓋垂の *r* と

して発音されるが，母音が後続しないときには歯茎接近音［ɹ］となる．

デンマーク語では /r/ は母音の前で口蓋垂の *r* として，母音が後続しないときには非成節的な後舌円唇開母音［ɒ̯］として実現する．

これらゲルマン諸語の中で，英語の *r* の変遷を推理する上でもっとも参考になるのはスウェーデン語における状況である．この言語で /r/ は母音の前で［r］（ないし旧デンマーク領であった南端部で口蓋垂の *r*）として発音されるものの，母音が後続しないときには，オランダ語の場合と同様に，原則として歯茎接近音［ɹ］として実現する．また，後者の場合で /r/ に歯茎音 /t d n s l/ が後続する場合には，その［ɹ］は分節音としての独立した地位を失って副次調音と化し，後続の歯茎音と合一してそり舌音［ʈ ɖ ɳ ʂ l］が実現されることになる．ノルウェー語ブークモールの場合もこれに極めて類似した状況にある．

さらに，IPA（2003: 190ff.）によると，現在のストックホルムを中心とする中央標準スウェーデン語ないしスヴェーア方言において，［r］が用いられるのは強調を伴う場合に限局され，/r/ は母音の前の位置でも通常［ɹ］と発音されるに至っているという．驚くべきことに，これは上記（1）で 17 世紀以降の英語に想定された状況にそっくりなのである．現実にスウェーデン語が以下の（5）ような /r/ の音声実現の変遷を経験した，ないし経験しつつあるのならば，やや遠縁とはいえゲルマンという同じ DNA を持つ英語が，過去に同様の推移を経験したと仮定することにも大きな無理はない．つまり，上記（1）は妥当に見える．

（5）　/r/ の音声実現の変遷

/r/（＋母音）	:	[r]	⇒	[r]	⇒	[ɹ]/[r]（散発的）
/r/（＋母音以外）	:	[r]		[ɹ]		[ɹ]

口蓋垂の *r* の伝播

言語の改新が一点から波紋上に伝播すると考えたシュミット（Johannes

Schmidt, 1843-1901）以降，このような把握法は波紋説（Wellentheorie）として知られており，上記（2）に記した口蓋垂の *r* 音はしばしばこの波紋説の好例とされている（e.g. Trudgill 1975: 189f.）．事実，歴史的ならびに地政学的見地から（4）の口蓋垂の *r* の分布状況をながめると，そのような説明はかなりの妥当性を持っているように見える．

パリの文学サロンに集った文学史上有名な「才女たち」という閉じた人間グループの中で，舌先の代わりに口蓋垂をふるわせるという調音が「人為的に」採用され，この調音が人々の心をつかむ流行となってグループ外に急速に波及したという想定がそもそも信じ難いようにも思うが，仮に百歩譲ってこの流行がそのような経緯から周辺に及んだとすれば，その波がパリの政治的・文化的影響力によってフランス語圏全域，次いでフランスへの文化的憧憬が潜在するドイツとドイツ語圏をほぼ呑みこみ，さらに地続きのユトランド半島やオランダの一部に達することはありえないことではないかもしれない．さらに，現在ユトランドとコペンハーゲンの位置するシェラン島等，その東側の島嶼を主要部とするデンマーク王国の領土が，[7] かつて現在のスウェーデン南部ならびにノルウェーを含んでおり，当然これらの地域間の関係は極めて密であったはずだから，口蓋垂の *r* がユトランドから海を越えてこれらの島嶼部，スカンディナヴィア半島南部と西部に及ぶことにも合点が行く．北イタリアへの波はフランス語圏とドイツ語圏の両方から到来していると見られることであろう．[8]

トラウトマンの考察

（2）は無批判に採用されることも多く，あるいは古来の定説であるかのような印象も抱かせるが，実のところこれはさほど古いものではない．これをはじめて公にしたのはどうやらボン大学の英語学者トラウトマン（Moritz Trautmann, 1842-1920）[9] である．彼（1880: 208ff.）は英語教材 3 冊

を書評する過程で，ヴィットシュトック（Albert Wittstock, 1837-1903）氏による英独語の *r* 音の説明に疑義を呈し，これに関連して，当時すでにドイツ語でかなり広く用いられるに至っていた口蓋垂の *r* の由来と分布について詳しい検討を行う．

彼はフランス語において 16 世紀までは舌先の *r* たる［r］がもっぱら用いられていたこと（212f.），印欧語の *r* 自体がそもそも［r］であったこと（213f.），執筆時である 19 世紀末時点のドイツ語圏の大都市で口蓋垂の *r* が，農村部で［r］がそれぞれ主に用いられていること（214）を各種資料と経験によって確認し，仏独語に広まった口蓋垂の *r* の由来をフランス語内に求める．

モリエール『町人貴族』

トラウトマンはフランス語における口蓋垂の *r* の出現の証拠をモリエール（Jean-Baptiste Poquelin, dit Molière, 1622-1673）[10] の喜劇『町人貴族』（Le Bourgeois gentilhomme, 1670）の中に見た．問題の証拠は第 2 幕第 4 場において主人公のジュールダン氏（Jourdain）が哲学の先生（le Maître de philosophie）から正しい発音の指南を受けるシーン（6）に現れる．

（6）Molière（1993: 728f.）：

MAÎTRE DE PHILOSOPHIE : Soit. Pour bien suivre votre pensée et traiter cette matière en philosophe, il faut commencer selon l'ordre des choses, par une exacte connaissance de la nature des lettres, et de la différente manière

哲学の先生　わかりました．そのお考えによく従い，この事項を哲学者として扱うためには，事物の順序に従って始めねばなりません．すなわち，それぞれの文字の本質について，またそれらすべてひとつひとつ異なる発音について正確

de les prononcer toutes. Et là-dessus j'ai à vous dire que les lettres sont divisées en voyelles, ainsi dites voyelles parce qu'elles expriment les voix; et en consonnes, ainsi appelées consonnes parce qu'elles sonnent avec les voyelles, et ne font que marquer les diverses articulations des voix. Il y a cinq voyelles ou voix: A, E, I, O, U.

な知識を得ることです．この点について申し上げますと，文字は母音，それぞれが音を表しているためこう呼ばれるのですが，すなわち母音と子音に区別されるのであります．子音は，母音と共に発音され，もっぱら音をさまざまなやり方ではっきりと浮き立たせるためにこう呼ばれるのであります．母音あるいは音の種類は五つ，すなわちア，エ，イ，オ，ウ．

MONSIEUR JOURDAIN : J'entends tout cela.

ジュールダン氏：それはよくわかる．

MAÎTRE DE PHILOSOPHIE : La voix A se forme en ouvrant fort la bouche : A.

哲学の先生　アの音は口を大きく開けて発音いたします，ア．

MONSIEUR JOURDAIN : A, A. Oui.

ジュールダン氏　ア，ア．なるほど．

【中略】

MAÎTRE DE PHILOSOPHIE : Demain, nous verrons les autres lettres, qui sont les consonnes.

哲学の先生　明日は，ほかの文字，すなわち子音について見てみましょう．

MONSIEUR JOURDAIN : Est-ce qu'il y a des choses aussi curieuses qu'à celles-ci?

ジュールダン氏　今のと同じくらいおもしろいのか？

MAÎTRE DE PHILOSOPHIE : Sans doute. La consonne D, par exemple, se prononce en donnant du bout de la langue au-dessus des

哲学の先生　もちろんです．たとえば子音のダは，舌先を上の歯にあてて発音いたします，ダ．

dents d'en haut : DA.

MONSIEUR JOURDAIN : DA, DA. Oui. Ah! les belles choses! les belles choses!

ジュールダン氏　ダ，ダ．なるほど．ああ！　見事だ！　見事だ！

MAÎTRE DE PHILOSOPHIE : L'F en appuyant les dents d'en haut sur la lèvre de dessous : FA.

哲学の先生　ファは，上の歯を下唇に押しつけながら発音いたします，ファ．

MONSIEUR JOURDAIN: FA, FA. C'est la vérité. Ah! mon père et ma mère, que je vous veux de mal!

ジュールダン氏　ファ，ファ．その通りだ．ああ！　おやじ，おふくろ，あんたらを恨むぜ！

MAÎTRE DE PHILOSOPHIE : Et l'R, en portant le bout de la langue jusqu'au haut du palais, de sorte qu'étant frôlée par l'air qui sort avec force, elle lui cède, et revient toujours au même endroit, faisant une manière de tremblement : RRA.

哲学の先生　またラは，舌先を口蓋の上部まで持っていき，勢いよく吐き出される空気に押されて舌がたゆんでからまた同じ場所に戻る動きによって，一種の震動のようなものを起こして発音いたします，**ル**ルラ．

MONSIEUR JOURDAIN : R, R, RA; R, R, R, R, R, RA. Cela est vrai! Ah! l'habile homme que vous êtes! et que j'ai perdu de temps! R, R, R, RA.

ジュールダン氏　**ル**，ル，ラ，**ル**，ル，ル，ル，ル，ラ．本当だ！　ああ！　先生は何でも知ってるんだな！　今まで随分時間を無駄にしたなあ！　ル，ル，ル，ラ．(Molière 2001: 129-132)

（6）においてジュールダン氏はしかるべく舌先を呼気によってふるわせ，歯茎後方に連続的にぶつける古来の歯茎ふるえ音［r］の調音方法について指導を受けるのであるが，わざわざこんな指導を受けるからにはジュールダ

ンが常用していたのは［r］以外の *r* 音であったとも考えられる．だとすれば，この *r* 音とはその頃新たに現れたはずの口蓋垂の *r* たる［ʀ］に違いない．これがトラウトマンが抱いた理路であろう．

しかし，（6）においてジュールダン氏が［r］以外に指導を受けた音は母音ＩＥＡＯＵ（すなわち恐らく［ｉｅａｏｕ］）と子音の［ｄｆ］のみであり，これらの中に当時新たな発音習慣が生じていたと考えられる音は含まれていない．ジュールダン氏が繰り返し賞賛のことばを発するのは哲学の先生によって提示される調音音声学的な説明が要を得た適切なものであって，個々の音の正確な調音方法をはじめて意識し，素直に感動したためとも考えられる．すなわち，問題の場面において哲学の先生が歯茎ふるえ音［r］を指導しているからといって，ただちにジュールダン氏が口蓋垂の *r* を用いていたと断じていいとは思われない．

シャペル＆バショーモン『旅行記』

しかしながら，以下の（7）からすれば，パリのフランス語に口蓋垂の *r* が現れたのは，どうやらモリエールの『町人貴族』が初演された 1670 年よりも以前であったことは確実であって，当時のパリではすでに口蓋垂の *r* が広まりつつあったと，またジュールダン氏が用いていたのは口蓋垂の *r* であったと考えて差し支えないように見える．その証言はシャペル（Claude-Emmanuel Lhuillier, dit Chapelle, 1626-1686）と友人のバショーモン（François Le Coigneux de Bachaumont, 1624-1702）[11] が 1656 年に行った旅の記録の中にあらわれる．

（7）Chapelle & Bachaumont（1788: 245）：

Dans cette même chambre, nous trouvâmes grand nombre de	その広間には大勢の女性がおいでになった．当地で最も礼節を知

dames, qu'on nous dit être les plus polies, les plus qualifiées, & les plus spirituelles de la ville, quoique pourtant elles ne fussent ni trop belles ni trop bien mises. A leurs petites mignardises, leur parler gras, & leurs discours extraordinaires, nous crûmes bientôt que c'étoit une assemblée des précieuses de Montpellier; mais bien qu'elles fissent de nouveaux efforts à cause de nous, elles ne paroissoient que des précieuses de campagne, & n'imitoient que foiblement les nôtres de Paris.

り，最も洗練され，最も気の利いたご婦人方との触れ込みだったのだが，実際は器量も身なりもいまひとつであった．彼女らのいちいち仰々しい身のこなし，喉を使った話し方，奇妙な挨拶に接して，ここにはモンペリエの「才女たち」が集まっているのだなとすぐに合点した．彼女らは同席する我々のために色々と気を配ってくれたものの，やはり田舎の「才女たち」にしか見えず，本場パリの「才女たち」たちの真似ごとをやっているにすぎなかった．
（神山試訳）

トラウトマン（1880: 215）の指摘を俟つまでもなく，（7）は，「才女たち」の流行がシャペルとバショーモンの旅に先んじて，17 世紀中葉よりも以前にパリに生まれたこと，そのことばの特徴には，古英語のケニング（kenning）にも似た迂言の多用等に加えて，口蓋垂の *r* が含まれていたこと，そして口蓋垂の *r* はパリから周辺に及び，17 世紀中葉にはすでに南フランスのモンペリエに達していたことを示す重要な証言である．

ケンペレンの報告

それから 1 世紀を経て，知る人ぞ知る言語音声の先駆的研究者ケンペレン（Wolfgang von Kempelen, 1734-1804）[12] は 1791 年に公刊された『人間

言語のしくみ（ならびに音声発生装置（著者制作）の解説）』（*Mechanismus der menschlichen Sprache nebst der Beschreibung seiner sprechenden Maschine*）において興味深い記述（8）を残している．モリエールやシャペルとバショーモンも明示こそしていないものの，新たに現れた口蓋垂の *r* 音に対しては幾分か苦々しい，否定的な感情を持っていたことが窺われるが，歯に衣着せぬケンペレン（1791: 328ff.）は G. das Schnarren ないし F. parler gras，すなわち口蓋垂の *r* をきっぱりと「*r* 音の誤り」（Fehler bey dem R）と言い切っている点がまず特筆される．さらに，彼はパリの *r* 音についての貴重な報告を残す．

（8）Kempelen（1791: 330f.）[13]：

In Paris schien es mir, als wenn wenigstens der vierte Teil der Einwohner schnarrte, nicht weil sie das rechte R nicht aussprechen können, sondern weil man eine Annehmlichkeit darein gesetzt hat und es einmal zur Mode geworden ist, und diese Mode kann nicht wie andere Moden aufhören, denn ganz 【*sic*】Familien haben das Zungen=R längst verlernet, und das Schnarren wird sich bey ihnen auf Kindeskinder fortpflanzen.

パリでは住民の少なくとも 1/4 が喉の *r* を発音しているかのように思われた．喉の *r* を使うのは，正しい *r*【= [r]】が発音できないからではなく，喉の *r* が彼らの好みとなり，以前から流行になっているためである．他の流行はすたれるものだが，この流行がすたれることはなかろう．家族全員が舌先の *r* をとうに忘れ去っていれば，そんな家族では喉の *r* が子々孫々に伝わって行くものなのだから．（神山試訳）

恐らく 17 世紀前半にパリに登場し，「才女たち」の流行から同世紀中葉にはすでに南フランスにまで達していた口蓋垂の *r* が，フランスでもしばらくの間あまり歓迎されなかったことは想像に難くない．だが，18 世紀末の段階でパリの住人の 1/4 にしか広まっていなかったというのは少々控えめ過ぎる見積もりのようにも見える.[14] とはいえ，提示された印象主義的な根拠は説得性に欠けるものの，口蓋垂の *r* がその後拡大してゆくと見たケンペレンは誠に炯眼であった．事実，周知のように口蓋垂の *r* はパリのフランス語において支配的となったのである．

トラウトマン説の細部と限界

以上を勘案すれば，口蓋垂の *r* が誕生・伝播する経緯についてトラウトマン（1880: 208ff.; 1884-86: 240ff.）が想定するのはほぼ（9）～（14）のような推移である．これが，いわば（2）説の細部である．

（9）　17 世紀前半，パリの文学サロンに集った「才女たち」の中心的人物の中に，恐らく何らかの先天的な調音器官（恐らく舌先）の不具合によって舌先の *r* を発することが困難な人物が存在した．その人物は舌先の代わりに口蓋垂をふるわせる音を *r* 音として常用した．

（10）「才女たち」は，恐らくその中心的人物への憧憬から，その人物の発音上の特徴を模倣しはじめ，ついには口蓋垂の *r* が「才女たち」にあまねく用いられるに至った．これにより口蓋垂の *r* は「才女たち」のいわばトレードマークとなる．

（11）　17 世紀中葉までにはパリに倣ってフランス各地に「才女たち」が登場し，彼女たちもパリの「才女たち」と同じく口蓋垂の *r* を常用した．

（12） パリにおいて口蓋垂の *r* が「才女たち」以外にも用いられるに至り，この *r* の流行がパリから徐々にフランス語圏全域に及んだ.

（13） 口蓋垂の *r* はさらにドイツ語圏に波及し，19 世期中葉までに都市部を中心にドイツ語圏において半ば一般的となった.

（14） 口蓋垂の *r* はドイツ語圏ないしフランス語圏からさらにオランダ，デンマーク，北イタリア等に達した.

ところで口蓋垂の *r* の祖たる「才女たち」の中心的人物とは一体誰なのだろう．トラウトマンもフィエトルも個人名を特定していないが，17 世紀前半，創成期のパリの文学サロンにおいて，「才女たち」が挙ってその発音の癖を真似するほどのカリスマ性と影響力を発揮し得た人物と言えば，文学サロンの生みの親，有名な青い部屋（la chambre bleue）の主催者であるランブイエ侯爵夫人カトリーヌ（Catherine de Vivonne, marquise de Rambouillet 1588-1665）[15] その人こそが最有力候補と考えられよう.

さて，確かに（9）～（14）は（4）に示された地域における口蓋垂の *r* の分布を矛盾なく説明できるようにも見える．しかしながら，実のところヨーロッパにおける口蓋垂の *r* は（4）記載の諸地域に限局されているわけではない．特に下記 2 地域に口蓋垂の *r* が用いられていることはかなりよく知られている.

（15） イングランド北東部，ニューカッスルを中心とするタイン川の河口地域（タインサイド）に行われる方言（ジョーディー Geordie 等）においては，口蓋垂の *r* が用いられ，しばしば Northumbrian *burr* と称される（Wells 1986: 367ff.）.

（16）　ポルトガル語（ヨーロッパ）において，かつては歯茎ふるえ音［r］が標準とされたが，現在のリスボン方言では口蓋垂の *r* が広く用いられる（IPA 2003: 172）.[16)]

さらに，（4）に記された地域とは縁の薄い他の地域においても部分的に口蓋垂の *r* が行われることがある．例えばロシア語においても稀にこの音が用いられることがあり，[17)] ロシア革命の指導者レーニン（Владимир Ильич Ульянов, псевдоним Ленин, 1870-1924）やノーベル平和賞を受けた物理学者サハロフ博士（Андрей Дмитриевич Сахаров, 1921-1989）もこの音を用いていた.[18)]

ロシア語に行われる口蓋垂の *r* には恐らく以下の3種を区別せねばならない：

（17）　a. ユダヤ系住人の習慣による口蓋垂の *r*（ドイツ語の影響）
　　b. ロシア貴族の習慣による口蓋垂の *r*（フランス語の影響）
　　c. 上記以外の口蓋垂の *r*

（17a）は長期にわたってドイツ語の影響を色濃く受けて成立したイディッシュ語の併用者によって，（17b）は若年のうちからフランス語に深くなじんだロシア貴族によって，それぞれ暫時保持された発音習慣と考えられるから，口蓋垂の *r* はそれぞれドイツ語とフランス語の影響によって取り入れられたとみなすことができるだろう．すなわちこれらは（2）ないし（9）～（14）に特に矛盾しない.

しかし，今日のロシア語において（17a, b）に由来する口蓋垂の *r* が用いられることは恐らく絶無に近いと思われ，まま用いられることがある口蓋垂の *r* は，むしろ起源不明の（17c）に属す場合が絶対的に多いと見積もられる．レーニンとサハロフの出自を勘案すれば，彼等が用いた口蓋垂の *r* も恐らく（17c）と考えられよう.

（15），（16），そして（17c）の口蓋垂の *r* はいったいどこからもたらされたのだろう．これらの地域は（4）記載の中北欧諸地域のいずれにも接しておらず，また，一握りの貴族の場合を除いて，問題の現象が伝播したはずの 17 ～ 18 世紀頃にもその前後にもそれらの地域と特に密な関係があったとも考えられない．そのため，これらの地域の口蓋垂の *r* を波紋説によって説明することは恐らく無理であって，この説に固執する限り，これらの地域に口蓋垂の *r* が生じた真の原因解明はかなわない．

イェスペルセンの反論

言語音声の観察と分析に異能を発揮したコペンハーゲンのイェスペルセン（Otto Jespersen, 1860-1943）[19] は，トラウトマン説に反論して，様々な *r* 音が生まれる音声学的背景について独自の見解を残している（1889: 72ff.）．今日的な音声学の観点から配慮を加えつつ言外の細部を補足するならば，その骨子は下記の（18）と（19）にまとめることができるであろう．

（18） a. 歯茎ふるえ音［r］は，調音が弱まると舌尖のふるえが失われ，また舌尖と歯茎との接触が緩くなり，歯茎摩擦音［z］，さらに歯茎接近音［ɹ］に転じやすい．

b. ［r］>［z］

c. ［z］>［ɹ］

（19） a. 歯茎接近音［ɹ］の調音に際しては，舌先が歯茎に接近するとともに中舌部は低められて硬口蓋との間隔は広くなる．

b. 舌の体積は一定のため，中舌部に凹みが構成されれば，これを補うべく後舌部の体積は逆に増大し，結果的に後舌部は口蓋垂周辺に接近する．すなわち，歯茎接近音［ɹ］は不可避的に舌根後退

を伴う.

c. ［ɹ］の調音から何らかの原因で舌尖と歯茎との接近が失われれば，口蓋垂接近音［ʁ̞］が発される．このような場合，該当言語において［ɹ］の占めた音韻論的位置を［ʁ̞］が受け継ぐことになる.

d. 持続音性を保ちつつ明瞭な調音を心掛けるならば，［ʁ̞］は口蓋垂摩擦音［ʁ］（無声化しやすい環境では無声の［χ］），さらには口蓋垂ふるえ音［ʀ］に転じやすい.

（18, 19）のような想定が現実的であるならば，［r］が［z］を介して［ɹ］に至り，他方［ɹ］は［ʁ̞］を介してさらに［ʁ］（［χ］），［ʀ］に至るという推移が，地政学・社会的関係とは無縁の，純粋に自然発生的なものとみなされることになり，結果として，現在の英語の一般的 *r* 音である［ɹ］ばかりか，独仏語に広く用いられる口蓋垂の *r* たる［ʁ χ ʀ］までもが，そのような自然なプロセスによって本来的な歯茎ふるえ音［r］から得られることになる.

確かに（18, 19）の仮説性はかなり高そうに見え，そのためか，Viëtor（1894[3], 1898[4]: 166 ; 1915[6]: 203）が否定的な評価を下して以来，1 世紀以上にわたってまったく顧みられていないかのようである．しかし，ここで敢えて，フィエトルの判断は軽率であったと言いたい．いかに仮説性が高いとはいえ，波紋説に基づく通説（2）ないし（9）～（14）が説明に窮する事象（15, 16, 17c）が厳然と存在する一方で，（18, 19）がこれらに一定の説明を与えることができる以上，拙速に（18, 19）を取るに足らない謬見として退けたことは賢明でなかった.

［r］>［z］>［ɹ］

では，（18, 19）は現実に確認できる，可能な推移なのだろうか.

現在の日英独仏露等々，絶対的多数の言語で用いられる歯茎摩擦音［s z］は，舌尖（apex）を下げ，そのすぐ後方に位置する舌端（blade）の正中

部と歯茎との間に形成されるせばめによって調音される舌端的（laminal）［ʂ ʐ］である．他方，歯茎ふるえ音［r］は逆に舌尖を上げ，呼気を受けて振動する舌尖が繰り返し歯茎との瞬間的接触を行うことによって発される音であるから，この調音と舌端的［z̪］のそれの間には舌尖の位置における大きな隔たりがあり，［r］が易々と［ʐ］に転じるとは到底考えられない．

しかし，歯茎摩擦音［s z］には異なる音声実現も併存する点を忘れてはならない．例えばスペイン語を耳にすれば，その［s］が，我々の馴染む舌端的［ʂ］と異なることはすぐに了解される．実はスペイン語等，イベリア半島の言語を中心に比較的少数の言語においてのみ標準とされる音だが，ここで用いられている［s］は舌尖を上げて，歯茎との間で狭めを構成することによって調音される舌尖的（apical）な歯茎摩擦音であり，精密には［s̺］と表記される．その有声音である舌尖的［z̺］と歯茎ふるえ音［r］とは舌尖が歯茎に対峙するという共通の調音特徴を有し，何らかの事情によって舌尖と歯茎との接近具合が微妙に変化すれば，これらが互いに交替することは理論的に考えられないことではない．

そして，実際に（18b）［r］>［z］は，例えば F. chaire と chaise に見られるように，フランス語に明白な痕跡をとどめており，そこに生じる［z］は本来的に舌尖的な［z̺］であったと考えられる．上例は Gk. καθέδρᾱ “seat” を借入した Lat. cathedra に由来し，語頭 c［k］の ch［tʃ］（>［ʃ］）への硬口蓋化（palatalization）と語中の t（h）と d の脱落を経た OF chaiere[20] を受け継いでいる．すなわち，今日では公職等の抽象的な「座」を表す F. chaire こそが本来の形であって，通常の「椅子」の意味で用いられる F. chaise は（18b）を経た新形に他ならない．

フランス語に見られるこのような（18b）の推移について最初に指摘したのは，豊富な滞仏経験からフランス語に熟達し，イギリス国教会の創始者たるヘンリー 8 世にも仕えたイギリス人牧師ポールズグレイヴ（John Palsgrave, *ca.*1485-1554）らしい：

（20） ... they of Parys sounde somtyme r lyke z, sayeng pazys for parys, pazisien for parisien, chaize for chayre, mazy for mary and suche lyke, ...（Palsgrave 1530: 34）
... パリでは r が時に z のように発音されて，pa*r*ys【*i.e.* Paris】は pa*z*ys と，pa*r*isien を pa*z*isien と，chay*r*e【*i.e.* chaire】は chai*z*e【*i.e.* chaise】と，ma*r*y【*i.e.* mari】は ma*z*y 等々となる ...（神山試訳）

翌年にはラテン名シュルウィウス（Jacobus Sylvius）で知られた高名な解剖学者デュボワ（Jacques Dubois, 1478-1555）がフランス人として最初のフランス文法を物し，（18b）の現象に触れている．（18b）とは逆の［z］>［r］を示す事例も併せて扱われているが，これらは過剰矯正（hypercorrection）によって生じた一時的な形態であろう．

（21） In vtroque vitio mulierculæ sunt Parrhisinæ: & earum modo quidam parum viri, dum r in s, & contra Eretriensium more, s in r, passim magna affectatione conuertunt, dicentes Ieru Masia, ma mesè, mon pesè, mon fresè, & id genus sexcenta, pro Iesu Maria, merè, perè, frerè.（Sylvius 1531: 52 ; 1998: 86, 260）
両欠点【= s［z］を r と，r を s［z］と発音すること】を示すのはパリの若い女性である．また彼女らを真似て一握りの男性も一方では r を s【[z]】に，また反対にエレトリア[21] 人のごとく s【[z]】を r に，いずれの場合にも大いにわざとらしく入れ替える．そうして多くの同郷人ともども Ie*s*u【*i.e.* Jésu】Ma*r*ia, ma me*r*è【*i.e.* mère】，mon pe*r*è【*i.e.* père】，mon fre*r*è【*i.e.* frère】を Ie*r*u Ma*s*ia, ma me*s*è, mon pe*s*è, mon fre*s*è と発音するのである．（神山試訳）

さらに翌々年，数学者・哲学者ボヴェル（Charles de Bovelles = Carolus Bovillus, 1479-1566）も同趣旨の報告を行う．

（22） Non tacendum est istic, aliud Parrhisiorum vitium in literis R & S. Innumera sunt eius rei exempla tam in Latino interim sermone, quam in vulgari. Ieru Masia, pro Iesu Maria. Misesese, Miserere. Cosona, Corona. Mese, frese: pro mere, frere. Et contra, courin, pro cousin. Oreille, pro oseille, id est acetosa herba.（Bovelles 1533: 36 ; 1973: 113）

口をつぐむべきでないのは，RとS【[z]】の文字に関するパリの人々のもう一つの欠点である．俗語【*i.e.* 当時の口語フランス語】においてと同様，近頃のラテン語【*i.e.* 文語】においても，この咎人の例は数知れない．こうして Iesu Ma*r*ia【*i.e.* Jésu Maria】は Ie*r*u Masia に，Mise*r*ere は Mise*s*ese に，Co*r*ona は Co*s*ona に，me*r*e【*i.e.* mère】と fre*r*e【*i.e.* frère】は me*s*e と fre*s*e になり，逆に，cousin は cou*r*in と，野草のスカンポを意味する o*s*eille は o*r*eille と発音される．（神山試訳）

宗教改革においてカルヴァンの後継者となったベザ（Theodorus Beza = Théodore de Bèze, 1519-1605）はパリに加えて，ブルゴーニュでの［z]>[r］と［r]>[z］について報告する．

（23） Parisienses autem, ac multo etiam magis Altissiodorenses & mei Vezilij simplicem【*r*】etiam in *s* vertunt, vt courin, Masie, pese, mese, Theodose pro cousin, Marie, pere. mere, Theodore: ...（Beza 1584: 34）

また，パリの人々，さらに【ブルゴーニュの】オセール（Auxerre）や私の出身地ヴェズレー（Vézelay）の人々も単純な r を s【[z]】に転じる．そのため，cousin, Ma*r*ie, pe*r*e【*i.e.* père】，me*r*e【*i.e.* mère】，Theodo*r*e【*i.e.* Théodore】を cou*r*in, Ma*s*ie, pe*s*e, me*s*e と言っている．（神山試訳）

以上より，15～16 世紀，すなわち恐らく（2）ないし（9）～（14）の過程がまだ生じていない段階において，少なくともフランス語の一部の方言には（18b）［r］>［z］（= ［ʐ］）の変化が生じていたと断じることができる．その後も，フランス語諸方言ないし周辺言語における（18b）は歴史学者タルベ（Louis Hardouin Prosper Tarbé,1809-1871）による歴史的研究（1851: 170f.）に触れられ，Diez（1856[2]: 442; 1870[3] = 1876[4]: 454）に総括された後も Meyer（1875: 184ff.), Joret（1878: 155ff.）によって検討が加えられている．

一方，（18b）が英語においても生じたことを疑わせる間接的証拠がある．そのうちもっとも顕著なのは，早くも 13 世紀からはじまったとされる以下の変化である：

（24）［rs］（>［ss］）>［s］

例えば挿入的に用いられる I *dare* say における dare は，綴り字通りの発音が一般的となった今日でも，しばしば例外的に *r* 音の痕跡を失った［de］[22)] と発音されるが，この現象の背後には（18b）が隠れていると考えられる．このようなケースにおいて，Jespersen（1909: 228f.), Jordan（1925: 150f.), Luick（1940: 1056ff.）は *r* 音が単純に脱落したとして取扱い，脱落に至る過程に潜在した音変化の細部については特に考察を加えていない．

実のところ *r* の脱落は他の音声環境に比して *s* の前において突出して多いのだが，［rs］ないし後に仮定される［ɹs］という音連続には特に調音上の困難があるとは考えられず，該当の現象が生じた時代に［r］ないし［ɹ］のいずれの音価を想定するにせよ，この位置で *r* の脱落を誘発するような要因は見いだされない．ならば，何らかの *r* と *s* の相互作用を疑わねばならない．［s］の前で［r］が失われる以前に後続音の作用によって何らかの変容を受けたとすれば，それは Jespersen（1889）の想定した（18b）がもっとも有望に思われる．最終的に脱落する以前の段階で *r* が一時的に［ʐ］の段階を経

たと推定すれば，その後の変容にも妥当な音声学的説明を与えることが可能となる．すなわち，I dare say に含まれた本来の歯茎ふるえ音［r］は，その舌尖の顫動を失って舌尖的［ʐ］に弱まり，次いで直接後続する舌端的無声摩擦音［s̪］への同化と縮約によって，順次以下のような変化を被ったとみなしうるのである．

（25）［rs］>［ʐs̪］>［s̪s̪］>［s̪ː］>［s̪］

実際，母音が先行し，［s］以外の音が後続する *r* は何らかの形でその痕跡を残している．I *dare* say の *r* が脱落する一方で，これに倒置を加えて *dare* I say とすれば，本来そこにあった *r* 音は母音間で保持されて［deɹ］の形で今日に至り，[23] 他方 You *dare*! のように後続音がない，ないしは *s* 以外の子音が後続する場合においては，*r* の要素は音節副音的な R 音性母音（rhotacized vowel）［ɚ］として暫時残存した．こうして得られる二重母音［eɚ］がいわゆる “rhotic” の地域に保持され，“non-rhotic” の地域では R 音性が失われて［ɛə̯］に至っていることは周知のとおりである．

上記の碩学諸氏が報告するように，かつては ho*rs* “horse” > ho*ss*，sca*rse* “scarce” > sca*c*e，mo*rs*el > mo*ss*el 等々のように中英語末期を中心に一時的に［rs］（>［ss］）>［s］を示す語は多々あった．だが，これらがその後大部分淘汰されたことにより，実のところ，英語においてこの推移を今日まで伝える語はさほど多いとは言えない．編み物用の毛糸の名である wo*rs*ted［'wʊstɪd］や，イングランド中西部の古都であり，わが国でも特にソースの名で有名な Wo*rc*ester［'wʊstə］はかなり頑なな例であって，*r* の綴りを保ちつつも，発音上 *r* の痕跡を示さないが，その反面，かつての該当語の多くが綴り字通りの発音に変化している．例えば上記毛糸の原産地 Wo*rs*tead はもともと毛糸と同じく［'wʊstɪd］と発音されたはずだが，今日ではもはや綴り字発音［'wəːstɛd］が一般的となった．他方，発音の変化に合わせて綴りを変えた場合も散見され，例えば淡水魚の名 OF dars を借入した ME dars は問

題の［rs］（>［ss］）>［s］の過程を経，さらに発音に合わせて綴り *r* も失って今日の dace に至る．他にも例えば nurse, burst, first の古風な異形として，この推移を経た nuss, bust, fust 等々が見いだされる．

さらに，（18b）の出力値である［ʐ］ないしその無声の片割れ［ʂ］が，現在の英語において実際に *r* 音として発される場合があることも指摘しておきたい．例えば E. dry と try の音声実現は通例［dɹaɪ］［tɹaɪ］のように簡略に記されるが，やや精密に表記すればそれは［d͡ʐaɪ̯］［t͡ʂaɪ̯］ないし［d͡ʐɹaɪ̯］［t͡ʂ̬ɹaɪ̯］であって，［d t］（すなわち舌尖的［d̪ t̪］）に後続する場合，［ʐ ʂ］が *r* 音として，ないしはその一部として用いられている．*r* 音が徐々に変化する過程において，調音に際する舌位置が類似する［d t］に後続した場合に限り，［ʐ ʂ］が *r* 音として固定したと考えられる．

（18b）［r］>［z］（=［ʐ］）の推移は数学で言うところのカタストロフィーにも似て，入口の値が徐々に，滑らかに，連続な軌跡を描いて変化し，出口の値に達するという性質の変化ではなく，入口の値は徐々に変化したとは考えられるものの，舌尖と歯茎との瞬間的接触が複数回繰り返されるふるえ音（ないしそれが一回のたたき音）から，舌尖と歯茎との持続的な近接状態によって作られる摩擦音へと，いずれかの時点で値が突如ジャンプするという類の，不連続な軌跡を描く変化である．そのジャンプないしはカタストロフィーがいかにして行われたのかを解明することは難しく，また興味深い課題であるが，暫定的にその点に触れないとすれば，上記のように少なくとも英仏語がそのカタストロフィーを実際に経験したと考えられる以上，検討すべき音変化は次のフェイズ（18c）へと進むことになる．

（18b）が不連続なカタストロフィー的変化であるのに対し，（18c）は連続な軌跡を描くような滑らかな変化である．実際，舌尖的歯茎摩擦音［ʐ］と歯茎接近音［ɹ］の調音は極めて近接しており，舌尖と歯茎との接近程度がほんのわずかに変化するだけで［ʐ］は容易に［ɹ］に転じると考えられる．現に［ʐ］と［ɹ］を別個の弁別的単位とする言語は見当たらず，その

ような言語は恐らく存在しえないかのように思われる．すなわち，フランス語であれ英語であれ，あるいはその他の言語であれ，（18c）が実際に生じた，またいつでも生じる可能性のある過程である蓋然性は極めて高い．

結局，（18）［r］>［z］>［ɹ］はあまりに突飛な印象を与えるものの，実際は現実言語に生じる可能性を充分に秘めていると言える．

［ɹ］>［ɻ］>［ɒ̹］

イェスペルセンが指摘したように，関係する言語や音声環境によって程度の差こそあれ，歯茎接近音［ɹ］には確かに（19a, b）のような調音上の特徴が認められる．しかしながら（19c）はカタストロフィー的な変化を含み，（19d）はありうるとしても，なかなか想定（19）全体に直感的に納得することは難しい．直接的な証拠がほとんど見いだされない中で（19）の現実性を検討することはとても難しい課題であり，勢い以下の推理に潜在する仮説性は極めて高いことを予めご理解いただかねばならない．

さて，［ɹ］の変化を探る上で，恐らくもっとも示唆に富むのが現在の英語である．［r］>［ʐ］を経て得られたと考えられる現代英語の *r* 音がしばしば咽頭化（pharyngealization）を伴うこと，北米等，地域によってはさらにこれが顕著となって調音位置もやや後退し，そり舌接近音［ɻ］となることはよく知られている．咽頭化を強めた要因については触れないとすれば，［ɹ］はその調音特徴を明確化する過程で，いわば自然に［ɻ］に達し，これが音節を担う場合の［ɻ̩］から「そり舌母音」（retroflex vowel）の［ɚ］が得られる．

音声学的前提についてやや補足しておくと，接近音（approximant）はもちろん子音の一種であるのだが，典型的な子音とは言えない．現に硬口蓋，唇と硬口蓋，軟口蓋，唇と軟口蓋で作られる接近音［j ɥ ɰ w］の音声的現実は，母音［i y ɯ u］のそれにまったく等しい．両者の差異は音節核となるか否か，すなわち純粋な調音の側面ではなく，音長と音配列の条件にのみに存すると言ってよい．半母音（semivowel）という別称からも推察されるよ

うに，接近音はいわば子音と母音の間のグレーゾーンに位置しており，典型的な子音に挟まれ，また充分な長さを与えられれば，立派に音節核＝母音として機能しうる.[24] 硬口蓋前部にややそり返った舌先を接近させて作られる接近音［ɹ］もまた，このような環境に置かれれば自身が母音としての役割を負って，母音の［ɚ］＝［ɹ̩］と化すのである.

英語音声学を心得た者にとっては自明のことだが，英語においてしばしばR音性母音と称され，便宜的に［ɚ］（ないし［ɝ］）と通例一様に記される母音には概ね2種類の音声実現がある．その一方は上記の音節主音的そり舌接近音［ɹ̩］，すなわち本来のそり舌母音［ɚ］[25] であるが，この記号は以下に述べる他方のR音性母音の表記にも便宜上併用されるため，ここでは仮に［ɚ］によってそり舌母音を明示したい.

他方，Catford（1988: 170）にも報告されているように，今日の北米等の“rhotic”の英語においてそり舌母音が用いられることはもはや比較的まれであり，代わって主に用いられるに至っているのは，いわゆる「もりあがり舌母音」（bunched vowel）ないし「奥歯の母音」（molar vowel）である．Catfordも同所で記すように，どうやらこの母音の調音方法にはさらに2種があり，そのためかこの母音をどのように表記するかについては未だ万人が納得する案は提出されていない.

ここで自説を披露させていただくと，小生はもり上がり舌母音の調音の真髄を，舌背後部の左右両端部分が軟口蓋に向けてもり上がり，逆に正中部分がくぼんで，舌背後部全体が口蓋垂を半ば包み込むようにして口蓋垂に接近することと咽頭化にあると見る．つまり，［ɹ］の場合に舌尖が歯茎後方から硬口蓋前部に接近して形成する大きく湾曲した呼気経路の形状を，上下逆に舌背後部が口蓋垂を包み込むように湾曲して接近することで擬似的に形成していると思われ，形成される呼気経路の湾曲の具合が概ね類似していることから，口腔内で類似する共鳴状態が得られ，結果として同様の籠った響きが得られると考えられよう．この理路に無理がないとすれば，もり上がり舌母音とは音節主音的な咽頭化した口蓋垂接近音［ʁ̩ˤ］の一種に他ならない.[26]

以下ではこれを仮に［ɚˢ］によって明示する．

さて，Jespersen（1907: 121 ; 1909: 191）によれば英語には音節主音的な *r* が遅くとも 16 世紀以前から存在していたとされている．（1）に示したように母音が後続しない *r* が 17 世紀までに歯茎接近音［ɹ］（>［ɻ］）に弱まったことを勘案すれば，遅くとも 17 世紀頃から暫時，英語の音節主音的 *r* は音節主音的そり舌接近音［ɻ̩］，すなわちそり舌母音［ɚ］として発音されていたと考えられるであろう．［ɻ̩］=［ɚ］が用いられていたまさにこの時代のいずれかの時点において［ɹ̩ˢ］=［ɚˢ］という異音が発生したはずであるが，この異音がカタストロフィー的に発生した原因については後掲のような咽頭化強化の傾向しか指摘できない．個人的印象に従えば，舌先を持ち上げるそり舌母音［ɚ］よりも，その必要がないもりあがり舌母音［ɚˢ］のほうがはるかに調音が容易であり，マルティネの言うエコノミーの原則に従って，同様の聴覚印象を与えつつ調音の労力が節約できる［ɚˢ］が長い目で見て徐々に勢力を増す資質を備えていたと考えられることも遠因の一端にあるかもしれない．

その後，（1）に従い，母音が後続しない位置で得られた *r* 音［ɹ］（>［ɻ］）が徐々に母音が後続する位置にも用いられるようになり，また近代英語期に英国容認発音を代表とする “non-rhotic” の方言において R 音性母音が R 音性を失い単純な弱化母音［ə］となった．

［ɻ̩］=［ɚ］の異音として生じたもりあがり舌母音［ɚˢ］=［ɹ̩ˢ］の援用から，咽頭化口蓋垂接近音［ʁˢ］が新たな *r* 音としての地位を獲得することも充分にあり得たが，英語におけるこの過程の進展は限定的のようである．それでも，Wells（2010）が報告するように，そのような音も現に用いられることがある．

以上からすれば英語の *r* 音は（26）のように変化してきたと考えられ，イェスペルセンの想定（18）に続き（19c），すなわち［ɹ］>［ɻ］>［ʁˢ］の過程も英語の歴史の中に跡付けられる．

（26）

	OE	ME *ca.*13c.	ModE *ca.*16c.	～	Present-day English	variation
prevocalic *r* e.g. *ra*	r	ɹ̝	ɹ̠/ɾ	(ɹ̠̊)	ɹ̠/ɾ (*rarer* r, ɹ, ɹ̠̊)	rhotic/ non-rhotic
			↑	(↑)		
postvocalic *r* e.g. *ar*	r	ɹ̝	ɹ̠/ɾ	ɹ̠̊	ɹ̠̊ = ɹ̠̊ ɹ̠̊ = ɹ̠/ɾ	rhotic
					ə / : (length)	non-rhotic
			↓	↑		
syllabic *r* e.g. *(e)r*	—	—	ɹ̠̩/ɾ̩	ɹ̠̩̊	ɹ̠̩̊ = ɹ̠̩̊ ɹ̠̩̊ = ɹ̠̩̊/ɾ̩	rhotic
					ə	non-rhotic

簡略のため咽頭化の符号を略すと，（19c）の［ɹ］>［ɹ̠］>［ɹ̠̊］という推移は，（27）に示すように，舌根を咽頭壁に接近させる咽頭化（ないし舌根後退）が徐々に進行して，まず舌尖の位置が後退し，ついには舌尖を用いた調音が放棄されて，舌尖と硬口蓋前部によって形成されていた湾曲した呼気経路が，口蓋垂と舌背後部によるそれに代替されるに至った過程として解釈することができる．

(27)

		主要調音位置	副次的調音特徴
ɾ	接近音	舌尖 → （後部）歯茎	舌根 → 咽頭化 +
ɹ̠		そり返った舌尖 → 硬口蓋前部	舌根 → 咽頭化 ++
ɹ̠̊		舌根 → 口蓋垂	舌根 → 咽頭化 +++

接近音［ɹ̠̊］は，英語においてもりあがり舌母音として用いられるような，子音の範疇の中でも最周辺に位置する音であり，これが母音化してしまうと，その前後に他の母音が配置されれば母音衝突（hiatus）や二重母音の発生を招く．英語は（26）のように音声環境によって *r* 音の実現を変えるという一風変わった習慣を身に着けることによって，また二重母音化はかなり寛容に受け入れつつ，先行母音の長音化も併用することでこの状況をほぼ難なく切り抜けたが，フランス語のように音声環境によって異なる *r* 音を発達させず，二重母音と音節の長短の区別を欠くような言語の場合にはそうはいか

ない．その結果，［ɣ̞］は，当該言語組織の要請に従い，その子音性を高めるための微調整が行われることが期待される．［ɣ̞］において舌根を口蓋垂にわずかに接近させればすぐに口蓋垂摩擦音［ʁ］が得られ，また，これを勢いよく発すれば口蓋垂が呼気を受けてふるえる［ʀ］がかなり自然に得られる．［ʁ］が鳴子音（resonant）ではなく，噪音（obstruent）として扱われるようになれば，無声音に隣接したり文末に配置される場合，自然に無声化して［χ］にも転じうる．これらはすべてフランス語の *r* 音に観察されるため，（19d）には充分現実性が認められる．ちなみに，［ɣ̞］を出発点とする（19d）は［ʀ］を出発点とする従来の定説（3）とは真逆の想定となる．

印欧語における *r* 音の変遷と関連諸問題 ― 結語に代えて

従来の定説（1, 2）によれば英語とフランス語の *r* 音の発達は別個のものと考えられた．だが，以上からすれば，イェスペルセンによる想定（18, 19）はかなりの現実性を帯びており，英仏語はこれらを併せた（28）のような共通の潜在的推移の過程をゆっくりと，別個に歩んでいると，そしてフランス語はすでに（28f）～（28g）の段階に到達している一方で，英語は（28c）～（28e）の段階にとどまっていると考えることができる．

（28） a.［r］> b.［ʐ］> c.［ɹ］> d.［ɹ̩］> e.［ɣ̞］> f.［ʁ］> g.［ʀ］/［χ］

印欧語全体を視野に入れるとき，少なくとも標準的には（28a）の段階を頑固に保持する言語も多数ある中で，（4）に記された仏独と周辺地域の言語，さらにはこれらの地域と隔絶した英語タインサイド方言（15），ポルトガル語（16），ロシア語の一部（17c）等に用いられる口蓋垂の *r* も原則的に（28）によって説明されると考えられる．だが，（6）～（8）のような証拠も見いだされる以上，波紋説に基礎を置いた従来の通説（2）ないし（9）～（14）も完全には否定できない．（4）に示されるような地理的ないし地政学的に密

な関係にある地域における口蓋垂の *r* は，そもそも印欧語に備わった（18, 19）ないし（28）の潜在性に，（2）の作用が重なって定着したとみなすのが順当かと思う．結局，現在の定説は必ずしも誤りとは言えない部分を多々含んでいるものの，以上を勘案して大幅に修正されねばならない．

さらに，（28）からは，印欧語の歴史的研究における焦眉の問題に関してもいくつかの示唆が得られるように思う．（28）は時の流れに従って左から右へと移り変わるような変化として提示したが，現在の英仏語の *r* 音の実現に見られるように，隣接する複数の項，あるいはまたドイツ語のように遠く離れた複数の項（28a, f, g）が併存するような言語状態も想定から外れていない．このような「ゆれ」が存在する状態を念頭に置くならば，以下のような着想も可能と思われる．

例えば英語の color のもとになったのはラテン語の color だが，その古形は colo*s*（< IE *kel-os- “that which covers”）であり，本来その属格形には *colosis が期待される．だが，実際には母音に挟まれた *s*［z］が *r* に転じた colo*r*is が属格形として用いられ，主格形 colo*r* はこれら斜格形から逆成された改新形であった．他方，E. ea*r*（< OE ē*a*re < Gmc. *auzon- < IE *aus-on-, cf. Goth. ausō）は本来の英語に属すが，ここに見られる *r* も［z］から得られた音である.[27] このように［z］が *r* に転じる現象（ロタシズム rhotacism）はラテン語やゲルマン語，また古くは（22）に言及されたギリシア語エレトリア方言等に見られ，決して例外的な現象ではないが，その音声学的な理由付けは今日に至るまで謎のままであると言ってよい．もし，これらの言語の *r* が（28a）から（28b）への移行を経験しつつあったなら，あるいは両者の間でゆれている状態にあったなら，当時これらの言語で今日と同様の舌端的な調音が行われていたとしても，［s̬］が母音間で有声化して得られた［z̬］が舌尖的［ʐ］と同一視され，*r* の異音として解釈されることは充分にありうる．

古英語に見られる前舌母音の「割れ」（breaking）と *r* 音の関係についても現状では腑に落ちない点が残っている．割れとは古英語の前舌母音が *h* ［x］, *r, l, w* ［w］の前に位置するときにわたりの後舌母音を伴って二重母音化する現象である．例えば Gmc. *f*e*xtan- “to fight”（< IE *pek-t- “to pluck the hair, fleece”, cf. Lat. pectō “I comb”）に由来する古英語の形態が，［x］の前で［e］が［eǫ］に「割れ」た結果，f*eo*htan ['feǫxtɑn］となるように，後舌母音と折り合いの良い軟口蓋音ないし唇軟口蓋音である *h* ［x］と *w* ［w］の前でこのような現象が起きることは容易に合点できる．*l* も今日の dark *l* ［ɫ］と同様に軟口蓋化されていたとすれば後舌母音のわたりを伴うのもわかる．問題なのは古英語の *r* が現在の定説（1）のように（28a）の段階にとどまっていたならば，Gmc. *x*e*rton- “heart”（< IE *kerd-on-, cf. Goth. haírtō ['xɛrto:]）の［e］が［eǫ］に割れて OE h*eo*rte なる形態が得られるとは考えにくいという点である．だが，従来の説に逆らい，すでに古英語期において音節末の *r* が咽頭化を伴う（28c）ないし（28d），あるいはさらに（28e）に達していたと仮定するならば，わたりの後舌母音を伴うのも当然ありうることであって，Runge（1974）, Lass（1983）, Kostakis（2007）, Bisiada（2009）のようにゲルマン語が早期のうちに（28g）の段階にまで達していたと考えることさえも検討の対象となりうる．いずれにせよ，定説（1）はかなりの訂正を迫られているように見える．

さらに，（28）はインド・イラン語とバルト・スラブ語の歴史にかかわる，いわゆる *ruki*-rule の観点からも興味深い．これは *i, u, r, k* に後続した *s の調音位置が後退する現象であって，原則としてインド語では［ʂ］，イラン語とバルト語では［ʃ］，スラブ語では［x］が現れる．もともとの *［s］が隣接音の調音位置に同化し，発生した様々な異音が語派によって何らかの音素に統合されたとは考えられるものの，インド語で［s］が現れる一連の例外が見いだされることもあって（cf. Burrow 1976），問題は複雑である．［i］に接する位置では［ç］が，［u］と［k］の場合には［x］がそれぞれ単純に期待される一方，従来の見解に従い *r* が［r］の状態に固定していたとすれば

予想されるのは恐らく［s̪］と思われ，これらが［x］に統合されるスラブ語の場合は辛うじて説明可能に見えるものの，それ以外の語派の状況をここから直ちに導くことは至難の業となる．だが，*r* の音声実現に（28）の変遷ないしゆれを認めることにより，問題解決のヒントが得られる可能性があるかもしれない．*r* が（28a, b, c）の段階にあれば隣接する *s のもっとも蓋然性の高い音声実現は［s̪］，（28d）なら［ʂ］，（28e, f, g）なら［χ］と予想されることになり，各語派において，そのいずれかの段階，ないし中間的段階で音韻的統合が行われたとみなすことにより，あるいは説得的な説明が得られるとも期待される．無論，このような立場を取る場合，*ruki*-rule は印欧祖語が完全に崩壊した後に各語派で別個に生じた現象とみなされねばならない．

同学諸兄にはご検討とご叱正のほどをお願いしたい．

［註］

1）　言語音声の表記には IPA を用いる．舌先のふるえが複数回の［r］と，これが 1 回だけのはじき音（flap）ないしたたき音（tap）［ɾ］との差異は多くの言語において自由な変異の関係にあるため，煩瑣を避けて以下では両者の差異を捨象して原則的に［r］と表記する．例外的にイベリア半島の諸言語とアルバニア語においてこれら各々が弁別的であるとされるが，その弁別は恐らく地域的な改新に帰される．前者における［r］/［ɾ］の区別はバスク（エウスカラ）語の基層的影響により誘発されたと考えられる一方，後者におけるこの区別の由来は明らかでなく，またこの区別を欠く方言もかなりあるとされ（cf. Orel 2000: 52, 57），これら各々が真に弁別的な単位であるようには見えにくい．

2）　専門性の低い書籍・辞書等において，あるいは音韻論的な配慮を含む場合において，これらの言語の *r* 音はしばしば一様に［r］と表記されるが，後掲のように現在の英仏独語の標準的な *r* 音はそれぞれ［ɹ ʁ ʀ］である．

3）　舌先が前部硬口蓋付近にまで達し，そり舌接近音［ɻ］として実現される場合を含む．

4）　［ɹ］の一般化にやや遅れて，ロンドンを含むイングランド東部において母音が後続しない［ɹ］が失われる，いわゆる non-rhotic の傾向が発生した．この傾向は北部を中心に周辺へと及び，英国容認発音（the Received Pronunciation: RP）にもこ

の発音が採り入れられている．そのため，一般にイギリス英語は non-rhotic であると略述されるが，イングランド南西部やスコットランド，アイルランドを中心に，[ɹ] を保存する rhotic の方言も広く存在する．他方，rhotic の地方から盛んに移民が行われた北米英語圏の大部分では，母音が後続しない [ɹ] ないしそこから転じた [ɻ] が R 音性母音（rhotacized vowel）[ɚ] として保存されるが，最初期にイングランド東部から移民が行われた合衆国最北東部，また南東部においては RP と同様の non-rhotic な発音が残る．http://en.wikipedia.org/wiki/Rhoticity_in_English 掲載の新旧分布図も適宜参照されたい．

5） この通称は 1659 年初演のモリエールの戯曲（邦名「才女気取り」）にも用いられている．

6） 技術的制限によりやむなく以下を利用する：http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Uvular_rhotics_in_Europe_updated.png（2014 年 5 月 17 日確認）．ドイツ南部とオーストリア等で口蓋垂の *r* は一般的とは言わないまでもかなり広く用いられており，これらが (4) において a の地域に分類されているのは現実に合致するとは思われない．

7） ここではグリーンランドとフェーロー諸島は考慮しない．

8） イタリア北西のヴァッレ・ダオスタはフランス語圏に，北東の南チロルはドイツ語圏に属す．

9） 写真は http://commons.wikimedia.org/wiki/File: Moritz_Trautmann.jpg より．

10） 肖像は http://fr.wikipedia.org/wiki/Moli%C3%A8re より．

11） 肖像は http://livresanciens-tarascon.blogspot.jp/2011/07/causerie-du-lundi-de-philippe-gandillet _11.html より．

12） ハンガリー名 Farkas Kempelen, スロバキア名 Ján Vlk Kempelen でも知られる．肖像はスロヴァキアの切手より．密かにチェスの名人を内部に忍ばせた虚偽的な自動人形「チェス指しトルコ人」（der Schachtürke）を制作・公開したことでもっとも有名であり，あたかも詐欺師のごとき印象を残すが，調音の綿密な観察に基づいて音声発生装置を制作するなど，音声研究に残した功績は実際貴重である．彼の死後，「トルコ人」は，メトロノームの発明者であるメルツェル（Johann Nepomuk Mälzel, 1772-1838）に売却されて合衆国で披露され，これを目にしたポー（Edgar Allan Poe, 1809-1849）は「メルツェルの将棋指し」（Maelzel's Chess-Player, 1836）でその内部構造について推理を行った．人形内部に人間が潜んでいるとしたポーの推理は誤りであって，実は人間はチェス台底部に潜んで人形を操作したという．

13） Trautmann（1880: 216）による引用にはわずかに原著と異なる箇所がある．

14） ただし，この観察が行われたのが出版直前の 18 世紀末であったとは限らない．仮に彼がヨーロッパのあちこちに遊学した 20 歳前後に受けた印象とみなせば，この見積もりは 18 世紀中葉のことと考えられることになる．

15）肖像は http://fr.wikipedia.org/wiki/Catherine_de_Vivonne,_marquise_de_Rambouillet より．

16）この習慣はブラジルにおいてまず定着し，その後ポルトガルに及んだかのように見えるが，ブラジルにおけるこの発音習慣の発生由来を含め詳細を欠く．

17）この現象は R. картавить と呼ばれる．一部の辞書には「*r* と *l* を不明瞭に発音する」に類する語義が記載されているが，その原義は「*r* を口蓋垂で発音する」（F. parler gras）に他ならない．その起源は恐らくカラスの鳴き声を模した PIE *ker- にあり，各種カラスの呼称として Lat. corvus, Gk. κόραξ, OE hrōc（> rook），hræfn（> raven）等に残る．

18）例えば下記等にて彼等が用いる口蓋垂の *r* を確認いただきたい：
http://www.youtube.com/watch?v=X_EcpFLmUaU（レーニン）
http://www.youtube.com/watch?v=lzf3FRSbEUk（〃）
http://www.youtube.com/watch?v=-Mw6yltlWuo（サハロフ）

19）写真は Jespersen（1962）より．

20）英語に借入されて ME chaiere > E. chair に至る．

21）アッティカの東側，エウボイア島中央部に位置し，古代に隆盛を誇ったポリス．当地の方言はラテン語と同様に母音間の *s* を *r* に転じるロタシズムを示す．Cf. e.g. Smyth（1894: 281）．

22）例えば Wells（1990）には daresay が /deseɪ/ と発音される旨の記載がある．

23）現代英語の観点からすれば，これはいわゆる linking *r*，すなわち他の音声環境では失われる音が母音の前で例外的に保持されるという liaison 現象の一種と捉えられる．

24）言語によってはふるえ音，側面接近音，鼻音も同様に音節核となることがあるが，その場合に得られる音節主音的［ṛ ḷ ṃ ṇ］等はもちろん母音ではない．すなわち接近音はこれらの鳴子音よりもさらに母音に近いと言える．

25）我が国の中高の英語教育ではもっぱらこの音の指導が行われているようだが，現在優勢なのはもりあがり舌母音であるため，そり舌母音のみを指導するのは適当でない．また，「そり舌」の意味で「巻き舌」や「舌を巻く」という表現が用いられていることも極めて不正確かつ不適当である．詳しくは神山（2008: 47f. ; 2012: 29）を参照されたい．

26）このアイディアは神山（1995: 141f.）に略述したものに等しい．故竹林滋先生（1926-2011）より賜った「鋭い指摘．私も同感」とのおことばに鼓舞されここに愚見の細部を披露する．

27）本来的な *s* からゲルマン語がいわゆるヴェルナーの法則を経て *r* を得る過程の概略については例えば神山（2015）を，その後ゲルマン語内で生じたロタシズムについて詳しくは例えば Smirnickij（1955: 78-89）を参照されたい．

［略語］

c.	century	IE	(Proto-)Indo-European
ca.	*circa*	*i.e.*	*id est*
E.	(Modern) English	IPA	the International Phonetic Alphabet
F.	(Modern) French	Lat.	Latin
G.	(Modern) German	ME	Middle English
Gk.	(Classical) Greek	ModE	Modern English
Gmc.	Proto-Germanic	OE	Old English
Goth.	Gothic	OF	Old French

［参考文献］

Allen, William Sidney 1978[2] *Vox latina: a Guide to the pronunciation of Classical Latin*. Cambridge University Press.

Beza, Theodorus (=Théodore de Bèze) 1584 *De francicae linguae recta pronuntiatione*. Genevae: Apud Eustathium Vignon (http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k504541.r=De+francicae+linguae+ recta+pronuntiatione.langEN).

Bisiada, Mario 2009 [R] in Germanic dialects — Tradition or innovation? *Vernaculum* (Journal of the University of York Linguistic Society) 1: 84-99.

Bourciez, Eduard 1937[8] *Précis historique de phonétique française*. Paris: Klincksieck.

Bovelles, Charles de (= Carolus Bovillus) 1533 *Liber de differentia vulgarium linguarum et Gallici sermonis varietate*. Parisiis: Officina Roberti Stephani (http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k 504739.r=de+differentia+vulgarium+linguarum+et+gallici.langEN) ; reproduite dans *Sur les langues vulgaires et la variété de la langue française*. Bibliothèque française et romane. Sér. D. Initiation, textes et documents 5 (1973). Paris: Klincksieck.

Burrow, Thomas 1976 Sanskrit words having dental *-s-* after *i, u,* and *r*. In Anna Morpurgos Davis and Wolfgang Meid (eds.), *Studies in Greek, Italic, and Indo-European linguistics offered to Leonard R. Palmer : On the occasion of his seventieth birthday June 5, 1976*. Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft.

Catford, John Cunnison 1988 *A Practical introduction to phonetics*. Oxford: Clarendon Press.

Chapelle (= Claude-Emmanuel Lhuillier) & François Le Coigneux de Bachaumont 1788 Voyage de Chapelle & Bachaumont. In *Voyages imaginaires, songes, visions et romans*

cabalistiques. Ornés de figures. Tome 28. Amsterdam & Paris: Rue et hôtel serpente (http://books.google.co.jp/ books?id=H2PQ_NW9hT4C&printsec=frontcover&hl=ja &source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false).

Collinge, Neville Edgar 1985 *The laws of Indo-European*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Diez, Friedrich 1836 *Grammatik der romanischen Sprachen*. Erster Theil. Bonn: Eduard Weber (https://archive.org/details/grammatikderrom16diezgoog) ; 1856 Zweite, neu verfaßte Ausgabe. (https://archive.org/details/grammatikderrom23diezgoog); 1870 Dritte, neu bearbeitete und vermehrte Ausgabe (https://archive.org/details/grammatikderrom04unkngoog) ; 1876 Vierte Auflage. Bonn: Eduard Weber's Verlags-Buchhandlung (https://archive.org/details/grammatikderrom05diezgoog).

Fleming, Edward 1997 Phonetic detail in phonology: Evidence from assimilation and coarticulation. In K. Suzuki and D. Elzinga (eds.), *Proceedings of the 1995 Southwestern Workshop in Optimality Theory (SWOT)*, Coyote Papers, 1997.

Gimson, Alfred Charles. 1980[3] *An introduction to the pronunciation of English*. London: Edward Arnold.

IPA: International Phonetic Association, the（ed.）；竹林滋，神山孝夫訳編 2003『国際音声記号ガイドブック：国際音声学会案内』大修館書店.

Jespersen, Otto 1889 *The articulations of speech sounds represented by means of analphabetic symbols*. Marburg: Elwert.

――― 1907 *John Hart's Pronunciation of English (1569 and 1570).* Heidelberg: Carl Winter.

――― 1909 *A modern English grammar on historical principles I: Sounds and spelling*. Heidelberg: Carl Winter.

―――（前島儀一郎訳）1962『イェスペルセン自叙伝：ある語学者の一生』研究社.

Jordan, Richard 1925, 1934[2], 1968[3] *Handbuch der mittelenglischen Grammatik: Lautlehre*. Heidelberg: Winter.

Joret, Charles 1878 Changement de *r* en *s (z)* et en *dh* dans les dialectes français. *Mémoires de la Société de linguistique de Paris* 3, p.155-162.

Kamiyama, Takao（神山孝夫）1995『日欧比較音声学入門』鳳書房.

――― 2008『脱・日本語なまり：英語（＋α）実践音声学』大阪大学出版会.

――― 2012『ロシア語音声概説』研究社.

――― 2015（予定）「OE *byrðen* "burden" vs. *fæder* "father"：英語史に散発的に見られる [d] と [ð] の交替について」『言葉のしんそう（深層・真相）：大庭幸男教授退職記念論文集』英宝社.

Kempelen, Wolfgang von 1791 *Mechanismus der menschlichen Sprache nebst der*

Beschreibung seiner sprechenden Maschine. Wien: Degen (http://digitalcollections.ohsu.edu/items/show/3849)

Kostakis, Andrew 2007 More on the Origin of Uvular [R]: Phonetic and Sociolinguistic Motivations. *IULC Working Papers*.

Lass, Roger 1983 Velar /r/ and the history of English. In Michael Davenport, Erik Hansen & Hans Frede Nielsen (eds.), *Current topics in English historical linguistics*. Odense University Press.

Luick 1940 *Historische Grammatik der englischen Sprache*. Erster Band, II Abteilung. Leipzig: Bernhard Tauchnitz.

Meyer, Paul 1875 Du passage d' *s z* à *r* et d' *r* à *s z* en provençal. *Romania* 4, p.184-194.

Molière (Robert Jouanny (ed.)) 1993 *Œuvres complètes II*. Paris: Bordas.

———（ロジェ・ギシュメール，廣田昌義，秋山伸子編）2001『モリエール全集』第 8 巻．臨川書店.

Orel, Vladimir 2000 *A Concise historical grammar of the Albanian language: reconstruction of Proto-Albanian*. Leiden: Brill.

Palsgrave, John 1530 *Lesclarcissement de la langue francoyse*; reprinted 1852 *L'éclaircissement de la langue française*. Par Jean Palsgrave, suivi de la grammaire de Giles du Guez, publié pour la première fois en France par F. Génin. Paris: Imprimerie Nationale（https://archive.org/details/ rosettaproject_fra_detail-1).

Runge, Richard M. 1974 *Proto-Germanic /r/: The Pronunciation of /r/ throughout the history of the Germanic languages*. Göppingen: Alfred Kümmerle.

Smirnickij, Alexandr Ivanovič (Смирницкий, Александр Иванович) 1955 *Древнеанглийский язык*. Москва : Издательство Литературы на иностранных языках.

Smyth, Herbert Weir 1894 *The sounds and inflections of the Greek dialects: Ionic*. Oxford: Clarendon Press (https://archive.org/details/soundsinflection00smytrich).

Sylvius, Iacobus (= Jacques Dubois) 1531 *In linguam gallicam isagoge, una cum eiusdem Grammatica Latino-gallica, ex Hebraeis, Graecis et Latinis authoribus*. Parisiis: ex officina Roberti Stephani (https://archive.org/details/fre_b1888673) ; reproduit dans *Textes de la Renaissance série Traités sur la langue française* (dirigée par Colette Demaizière) 22 (1998): Jacques Dubois (Sylvius), Introduction à la langue française suivie d'une grammaire (1531), Texte latin original, Traduction et notes de Colette Demaizière. Paris: Honoré Champion Éditeur.

Tarbé, Louis Hardouin Prosper 1851 *Recherches sur l'histoire du langage et des patois de Champagne*. Tome premier. Reims: Imp. de P. Regnier (http://books.google.fr/books?id=i4Ev AAAAYAAJ&pg=PP9&hl=ja&source=gbs_toc_r&cad=3#v=onepage&q&f=false).

Trautmann, Moritz 1880 Besprechung einiger Schulbücher nebst Bemerkungen über die R-Laute. *Anglia: Zeitschrift für englische Philologie* 3, p. 204-222.

——— 1884-86 *Die Sprachlaute im allgemeinen und die Laute des Englischen, Französischen und Deutschen im besondern*. Leipzig: Gustav Fock.

Trudgill, Peter；土田滋訳 1975『言語と社会』岩波新書.

Viëtor, Wilhelm 1887[2], 1894[3], 1898[4], 1915[6] *Elemente der Phonetik des Deutschen, Englischen und Französischen*. Leipzig: Reisland.

Watkins, Calvert (ed.) 1985, 2000[2], 2011[3] *The American Heritage Dictionary of Indo-European roots*. Boston: Houghton Mifflin Company.

Wells, John Christopher 1986 *Accents of English. 2: The British isles*. Cambridge University Press.

——— 1990 *Longman pronunciation dictionary*. Harlow: Longman.

——— 2010 Bunched/Molar *r* (John Well's phonetic blog ; http://phonetic-blog.blogspot.jp/2010/02/ bunchedmolar-r.html)

（文学研究科教授）

Abstract

Various *R*-Sounds in Europe
— Their Origins and Implications for Indo-European Linguistics —

Takao Kamiyama

The Indo-European inherited *r*-sound is, undoubtedly, the alveolar trill or tap [r]/[ɾ] which has been attested as well as preserved in very many related languages, both past and present. On the contrary, other *r*-sounds than the innate one are now commonly (not exclusively) used in several languages in Europe: the alveolar/retroflex approximant [ɹ]/[ɻ] in English; the uvular trill or fricative [ʀ]/[ʁ]/[χ] (hereafter uvular *r*) in French, German and their closest neighbors.

What on earth has brought about these, seemingly far from necessary, completely new *r*-sounds when the innate [r]/[ɾ] is still in perfect use? To this innocent question we already have what is almost believed to be a well established answer:

1) Before the 17th century the English *r* developed a weakened allophone at the end of a syllable. It lost the vibration of the tip of the tongue through weakening, which process yielded the alveolar approximant [ɹ] and its retracted variant [ɻ]. This new *r*-sound gradually came to replace the innate alveolar trill/tap in any position.
2) In the early 17th century French was affected by a well-known literary movement by *les précieuses* who employed the uvular *r* instead of [r]/[ɾ]. This novel sound gradually prevailed, following the *Wellentheorie*, first in Paris, then in the whole of France, and then it went beyond the border to Germany and their neighboring or closely related areas.

The answer looks plausible at a glance, but something is missing. In fact, a series of exceptions is found: the uvular *r* was and/or is more or less frequently used in "Geordie", Tyneside dialect of English, Portuguese, Russian among others, all of which are neither geographically nor geopolitically closely related to the uvular-*r* areas above.

Mostly conscious of those exceptions, young Otto Jespersen once proposed a completely different answer to the question. His view presupposes that the alveolar trill/tap is in itself accompanied by slight pharyngealization, which feature may, under ideal conditions, be strengthened further and further, first to weaken the trill/tap articulation, then to turn it into a fricative, then into an approximant, and eventually to retract the place of articulation until it gets far back to the uvula/pharynx area.

Unfortunately, the promising scholar's idea was treated as nonsense and has long since fallen into oblivion, but it can't be so, not only because it explains, regardless of their geographical/geopolitical distribution, virtually all the *r*-variations that Europe has ever had, but also because it has been successfully verified by following the scarce traces of *r*-sound change in English and French linguistic histories.

Now everything seems to imply that *r*-sound in general is potentially subject to following gradual change: [r] > [ʐ] > [ɹ] > [ɻ] > [ɹ̠] > [ʁ] > [ʀ]/[χ]. Supposedly it all begins accidentally and sporadically as a slip of the tongue or in disordered speech, thus seldom survives in standard/refined language with the lucky exception of English and French, in the latter of which the new *r*, seemingly uttered by an influential figure, sounded so "cool" that it expanded dramatically within only a few centuries.

In sum, the current theory about various *r*-sounds in Europe should definitely be revised in view of the chain of potential *r*-sound change, which, besides, may shed a new light on such disputed historical linguistic issues as Latin and Germanic *rhotacism*, Old English *front vowel breaking*, Indo-Iranian and Balto-Slavic *ruki-rule*, among others. Comments and critical remarks are welcome.

Key words: alveolar trill/tap, alveolar approximant, uvular *r*, Wellentheorie, pharyngealization